



Title	「デュナミス」をめぐる、ひとつの考察 -プラトン『ヒippias(小)』の問題-
Author(s)	吉田, 雅章
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1980, 20(2), p.1-15
Issue Date	1980-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15118
Right	

This document is downloaded at: 2018-11-14T18:23:13Z

「デュナミス」をめぐる、ひとつの考察

——プラトンの『ヒッピアス（小）』の問題——

吉 田 雅 章

On 'Dunamis'

——The Problem of Plato's *Hippias Minor*——

MASAKI YOSHIDA

『ヒッピアス（小）』という対話篇は、極めて小さな対話篇である。だが、わずかに十数頁（ステパヌス頁付け）の対話篇でありながら、「そもそも何が語られているのか」という、最も基本的な事柄については、未だなお、明らかになっていないとは決して思えない。この小篇がこれまでに、まづもって問題とされて来たのは、その対話篇の語る結論が、ほかの対話篇に於る、有名なソクラテスの教説と明白に矛盾するという点にある。だがしかし、ソクラテスの教説といえども、決して教説のみで在るのではなく、それぞれの対話篇に則した吟味のうちに語られるものであれば、この対話篇の結論もまた、対話そのものもつかたちに応じて語られる結論であろう。

以下の論述は、この対話のもつかたちを「デュナトス——デュナミス」（能力ある人——能力）の分析のうちに把えなが

ら、この小さな対話篇が「何を物語ろうとするものなのか」をめぐっての、ささやかな試みである。従って私は、出来る限りに於て、この『ヒippiアス(小)』の持つコンテキストの裡で論述することを願う。

一

まずこれからの探究のため、いわば予備的な事柄の検討から始めて、問題の手掛りとなるものを探り出しておきたい。「意図して過ちを犯し、不正を働いたりする人間は、善き人間以外のほかの者ではないであろう」(三七六B)という『ヒippiアス(小)』の、第二の吟味に於る最終的な結語は、何よりもまず、かのソクラテスそのひとの有名な教説「自ら進んで、悪を為す者は誰もいない」⁽⁹⁾に相入れぬものであると言われ、またさらには、我々の常識的判断からしてみても、到底承服し難きものであると看做されている。この『ヒippiアス(小)』の結語は、しかし、これらのそれぞれと相反し、齟齬すると語られる場合に、それが如何なる点に於てなのか、ということをまず明確にしておかなければならないだろう。というのは、ソクラテスそのひとの教説と我々の常識的判断とが、かの結語に相反すると言われる時の、その相反する点はそれぞれに異なったものだからである。

ソクラテスの教説との矛盾が問題とされる場合には、それは、「過ちを犯すこと、不正を働くこと」(*ἀμαρτανία, cōmētē*)ということが、「意図して、自ら進んで」(*ἐκείν*)に結びつけられる点、つまり「自ら進んで不正を働く」という、その点に存する。すなわち、ソクラテスの教説が、悪事を為すのは、何人に於ても決して「自ら進んで」のことではなく、常に「意に反して、心ならずも」(*ἄκων*)である、ということを主張するものであったことは、言うまでもなく周知のことであろう。従って、よし「意図して、過ちを犯し、不正を働く者」に、善き人間が述語付けられることになろうとも、悪しき人間が述語付けられることになろうとも、「意図して不正を働くものの存在」を認めるとすれば、その限りに於て、そしてまさにその点に於て、かのソクラテスの教説に相入れぬこととなるのである。だが常識の立場と矛盾すると語られる場合には、この「善き人間」が意図して不正を為す者に述語されるのか、それとも「悪しき人間」が述語されるのか、がまさに問題の焦点なのである。常識の立場と謂われるのは、「意図して不正を為すのは、悪しき人である」(三七二A)という主張

なのであり、この立場に於ては、「意図して、不正を為す者」の存在は、いわば、自明のこととして前提されている。そしてこの常識の立場こそ、実は、ヒippiアスそのひとがこの対話篇に於て、よって立つ立場でもあったのである。

以上に述べられた点は、今さらに取り立てて語ることもなく、自明のことだ、と思われよう。しかしこの『ヒippiアス(小)』をめぐって、もし人が何かを語ろうとする際には、予め確認して置かねばならぬことなのではないか。というのは、それぞれとの矛盾に於て指摘される、この二つの問題の巧妙な絡み合いの裡に、この対話篇の明かそうとする問題の地平が現われるように思われるからである。

少なくとも第二の吟味に於ては、ソクラテスの反駁は、ヒippiアスのよって立つ、この常識の立場へ向けて行なわれたものであった。従つて、この『ヒippiアス(小)』という対話篇のみに即して考える限りは、「ヒippiアスの立場(つまり、常識の立場)——対ソクラテス・ヒippiアス間の問答」がまず優位を占めると思われる。だが、そのことは、『ヒippiアス(小)』の結語と、他の対話篇に表明されている、所謂ソクラテスの教説との矛盾によつて指摘される点が無視される、ということではない。換言すれば、『ヒippiアス(小)』の意味は、ただ常識の立場を覆すパラドクスをのみ主張することにあるのでは決してない。

たしかにソクラテスは、最終的な結語を導き出すに際して、「もしそのような人間が誰かいるとすれば」(三七六B五—六)という条件文で示される、或る限定を加えていた。この限定は、当然のことながら、「善き人が意図して、不正を為す」ことへの留保なのでなく、「意図して、不正を為す者の存在すること」への留保なのである。この場合の留保が、実は何へ向けられたものであるのかという点は、極めて重要であると思われる。というのは、「意図して不正をなす人は、善き人である」ということは、『ヒippiアス(小)』の、それまでの対話の流れからする必然的な結句なのであるから、もしそのことへの留保が示されているのだとすれば、問答の歩みとは無関係に、何の理由をも与えられず示されるそうした留保は、極めて不可解なものとなるだろうからである。そうではなく、この留保が「意図して不正をなす人の存在すること」へ附されたものであることが、『ヒippiアス(小)』の問題を暗示しているように思われる。むしろのこと、この留保が真実のところ何を意味しているのか、そしてソクラテスは如何なる根拠に基づいて、この留保をなし得たのかは、これからの問

題として残されている。しかし少なくとも、この留保の意味とその根拠は、何かこの対話篇以外のところから測られ、説明さるべきではなく、対話篇そのものの内的な必然性によってこそ、確定さるべきものであろう。すなわち、「意図して不正を為す人」の存在することへの留保を可能にしているものは一体何であるのかが、常識の立場（ヒippiアスの立場）と、これを覆すソクラテスのパドクスの主張の絡み合いのうちに明かされねばならぬ。

『ヒippiアス（小）』の問う問いは、様々なヴァリエーションを持つものの、いわば全体を貫いている問いの形は、「意図して、不正を為す（嘘をつく）ものは、一体誰なのか」というものであったと思われる。しかしながらこの問いに、「善き人間」が、或いは「悪しき人間」が、と答えて行くに先んじて、「意図して、不正を為す（嘘をつく）もの」そのひと自身がまず問われねばならなかったのではないか。些か論点先取して言えば、「意図して不正を為すのは、悪しき人間である」という常識の立場（ヒippiアスの立場）を覆さんとする、ソクラテスのパドクスの主張には、「意図して、不正を為す（嘘をつく）もの」そのひと自身への問いに於て、行為に於る「意志」と「知識・能力」への問いが問われているのではないか。常識の立場は、「意図して、不正を為すもの」の存在することを、いわば自明のものとして前提し、さらに言えばそれが「智慧ある者」（三七二A、三七三B）であることをも前提しているのである。そうした前提を問うことなく、自明のこととするのは、この「意志」と「知識・能力」への問いを不問のままに置くことに他ならないであろう。それこそ、常識の立場を保守せしめることになるのである。

「意志」と「知識・能力」への問いを問うことの重要性を確かめてゆく、ひとつの基本的な考察が、まず第一の吟味に於て試みられているものだと思うのである。

一一

第一の吟味の「意図して嘘をつく人は、心ならずも嘘をつく者より優れている」（三七一E）という結語は、第二の吟味のその、原形を成すものであり、かつまたその一変形であるとも看做される。そしてこの結語を導くために、主題的に

証明されるのは、「同じ善き人が、嘘つき(伴りの人)でもあり、また真実まことの人(正直者)でもある」(三六七C、D、三六八A、三六九B)という命題である。これは、「嘘つき」と「真実の人」はそれぞれ、別の人である(三六五C)とする、ヒippiアスの主張に呼応して、これに対峙するものとして出されたのであった。

ところでしかし、その命題の意味するところはどのようなことなのだろうか。まさか、例えば同じ善き人が、同時に嘘つきでもあり、かつ真実の人(正直者)でもある、ということではあり得ないだろうし、またそもそも善き人が嘘つきであるというのも、理解し難いことだと思われよう。この命題が有意味に語られているとすれば、それは一体、どのような場面に於てなのであるうか。そして、その意味を明らかにするには、実際どれ程のことが語られなければならないのか。

第一の吟味は、まず「△嘘つき▽(伴りの人)」とはどのような人のことなのか、或いは何者でなければならないのか、が問われることにより始められる。

——△嘘つき▽とは、「何かを為すことの出来る人(能力ある人)」であり、さらに「為している当の事柄を知っている人」である。「△嘘つき▽とは、彼らがそれについて嘘をつく(嘘つきである)その当の事柄に関して(*eis anep pseudēs, eis taūta anep pseudōntai*)、能力ある人であり、智慧ある人である。——というのが、まずもってその答えとなっている。さらにこれに続いて、ソクラテス——ヒippiアス間に交される問答(三六六A—B)は次のようなものである。

ソクラテス　だが君が、嘘つきは彼らが嘘つきであるとされる、まさにそのことに関して、能力ある人であり、智慧ある人である、という場合に、どちらだと君は言うのだろうか、もし彼らが望むならば(*ean pōskanōntai*)、伴ることが出来る人(能力ある人)のことなのだろうか、それとも伴るそのことに関して、能力なき人のことなのだろうか。

ヒippiアス　能力ある(出来る)人のことだ、とこの私は言っているのだ。

さてしかし、この場合に(一)「彼らがそれについて嘘をつく、その当の事柄に関して」という、いわば同語反復的な限定は、一体如何なる意味での限定なのだろうか。さらにまた、(二)「嘘つきは、彼らが嘘つきであるとされる、まさにそのこと

に関して、能力ある人であり智慧ある人である」という表現が、「嘘つきとは、もし彼らが望むならば、伴うことの出来る人（能力ある人）のことである」へと書き改められる場合に、それが何を意味し、また如何にして可能となっているのであろうか、ということの問題にしよう。

(一)或る人が、能力ある人、智慧ある人であると扱えられる場合に、そこには「何に関して、なのか」の限定が必然のものとして要求される。この限定なしには、「能力ある人」「智慧ある人」という言葉はその意味を失なってしまう。何らかの特定の限定的な限定がそこに加えられ、その人の関わる、固有の領域の実在が確定されている時にのみ、それらの言葉は有意味となるのであり、そして、その限定は、その人が何者であると呼ばれるかと同語反復的である。というよりもむしろ逆に、例えば「計算に関わる事柄について、人が真なることを答え得る場合、その人は、それ（計算に関わる事柄）について、能力ある人であり、智慧ある人であるが故に、そうである」（三六六C—D）と扱えられ、それに応じて計算家という名称が、その人に与えられるのである。つまり、能力ある人が何者であるかは、その人が何に関わっているかを見定めることにあり、それに対応して、その人もまた「しかじかの人」と呼ばれるのである。

さてでは、以上のことは△嘘つき▽の場合にはどうなのであろうか。

彼らが能力ある人、智慧ある人と扱えられる限りは、当然彼らは、「能力ある人であることが、それによって限定される、そのこと」に依じて、△嘘つき▽の名を得ているのでなければならぬであらう。そしてこの場合、先に見た「彼らがそれについて嘘をつく、その当の事柄に関して」という、同語反復的な限定は、一見したところでは、能力ある人である△嘘つき▽に固有なる限定と思われる。しかし果してそうなのか。それは、計算家が能力ある人と扱えられる場合の、その計算家が「計算に関する事柄 (the *logos*)」によって限定されているのと同じ意味に於る限定なのだろうか。決してそうではないと思われる。なぜなら、この△嘘つき▽に関わる限定▽は、計算家の場合の、「計算に関する事柄」のように、嘘つきは、「能力ある人であること」を限定し、能力ある人たる△嘘つき▽の関わる、固有の領域の実在を扱えてはいないし、言い当ててはいないからである。実際、「彼らがそれについて嘘をつく、その事柄」について、人はさらに「△嘘つき▽が嘘をつく、その事柄が何であるのか」、「嘘つきは一体何について嘘をつくのか」を問うならば、そのことは極めて明らかに

なるう。人はその答えとして「計算に関する事柄について」とか、「図形に関する事柄について」とか、「天体に関する事柄について」とか、の答えを得ることが出来るだろう。

さてそれでは、そのことは何を意味しているのか。

計算に関する事柄についても、図形についても、天体についても、「誰か嘘つき(佯る人)が存在する」(三六七A—B)のであり、そして「その人は誰か」(三六七B)と云えば、「これらの事柄のそれぞれについて、能力ある人・智慧ある人」、つまり計算家であり、幾何学者であり、天文学者なのである。それぞれの領域に於て、それぞれの能力ある人が、 \wedge 嘘つき \vee であり、 \wedge 真実の人(正直者) \vee でもあった。従って、例えば \wedge 計算に関する事柄について \vee 、 \wedge 真と偽とをいずれも語り得るのは、計算家である。そして、その人は計算に関する事柄について能力ある人であり、智慧ある人である。さらにまた、その人がその点に於て、能力ある人であり、智慧ある人であると語られるまさに同じ点でその人はまた「善き人」でもあるのである。他の一切の知識についてもまた、このことは同様である。すなわち、 \wedge 嘘つき \vee とは、「何かを為すことの出来る人」(Dapatof ti rouca)という場合に、その「何かを為すこと」にヒッピアスがそうしたように「人々を欺くこと」を代入しても、それが「嘘つき」の、「能力ある人」であることを示すものとはならないのである。「人を欺くこと」(偽言を呈すること)は、凡そあらゆる知識の領域のそれぞれへとあまねく拡がっているからだ。してみれば、 \wedge 嘘つき \vee がそれによって限定され、「能力ある人」としての地位を確保するかに見えた、「嘘つきが、それについて嘘をつく、その事柄」とは、決して、彼に固有の、領域の实在を保証するものではなく、ただ単に「虚構された、一なるもの」でしかなかったことになるう。従ってそれは、虚構されたものである以上、凡そあらゆる知識の領域へと解消されざるを得ない、必然的な運命にあるのだ。凡そあらゆる知識のそれぞれの領域の外には、 \wedge 嘘つき \vee の棲まう、固有の棲みかなど、実のところ何処にもなかったということになるのである。⁽⁵⁾

(二)さてそれでは、「嘘つきは、彼らが嘘つきであるとされる、まさにそのことに関して、能力ある人であり、智慧ある人である」ということが、「嘘つきとは、もし彼らが望むならば、伴ることの出来る人(能力ある人)のことである」へと移行されることの意味は何であろうか。

ここに於ても、(一)の考察から生じた結果がその基礎とならねばならない。「能力ある人」という言い方が、真に意味をもって、有効に語られるのは、その人に固有の領域が示される場合であり、もし固有の領域が示されなければ、それは意味を持たない。従って「△嘘つき√とは、もし望むならば、伴ることの出来る人である」という、この書き改められた表現も、決してそれ自身では意味を充足させるものではなく、「何について、伴ることの出来る人(能力ある人)か」という、その固有の領域が明示される、そのつどそのつどの場に於てのみ、有意味に用いられることの出来るものである。であれば、その場合の「伴ることが出来る(能力ある)」とは、△嘘つき√の嘘つきたるが故に、「伴ることが出来る」のではなく、「何について、なのか」という、その領域によって限定される、それぞれの「能力ある人」の「真をも、偽をも語る能力ある」が故のことである。つまり、言ってみれば、この場合△嘘つき√とは、いわば架空の主語なのであり、この架空の主語を裏打ちし支えている真なる主語とは、それぞれの領域に於る、それぞれの「能力ある人」でなければならぬ。まさにここに、かの移行の、つまり書き改められることの可能な理由があった。というよりもむしろ正確には、書き改め、移行せざるを得ない理由が、そこにはあったのである。そしてこのことは、ソクラテスが、問題の文に続いて、確認し、裏づけていたことなのである。

「だが、能力あるひとであるのは、そのひとが望む時に、何であれ望むそのことを為すことの出来るという、そのそれぞれの人の人なのである」(三六六B)

だがしかし、ここには「能力ある人」をめぐる、もうひとつの重大な局面が拓かれて注視しなければならない。というのは、この場合、真・偽いづれを語ることを望むにせよ、しかし「そのいづれを望むか」は「能力ある人」の、それぞれのすることについて、真と偽いづれをも語る能力あることの故によるのではないと思われるからである。「能力ある人」の能力あることは、その人が「どちらを望むか」を決して根拠付けてはいないだろう。すなわち、何ものかを「能力ある人」として把握するその場面は、単にその人が△それぞれのものに関わり、真・偽いづれを為しうる√と把握するだけではおさえきれず、語り尽くせないその場へと拓けていることを、先のソクラテスの確認は教えているのではないか。無論しかし、こうした予感を語るのは、些か性急すぎることであり、今は差し控えておくのがよいと思われる。このことの持つ意味は、第

二の吟味の検討から、なおさらに考えられなければならないことである。

さて、第一の吟味をめぐる、以上のような分析が、どのような理解を拓くもののかを、くり返しをも含めて捕捉しておかなければならない。

「同じ善き人が、△嘘つき▽でもあり、また△真実の人▽でもある」という命題の論証のために行なわれた検討が、如何なる位相に於てあるもののかを、ひとははっきり確認しておかなければならない。それは決して、諸々の技術的知識の領域に於ては、肯定し承認され得る事柄が、所謂「道徳的な場面」に持ち込まれ、或いはまたそこへとすり換えられたことによつて生ずる、パラドクスではない。もしそう理解するなら、ひとは、この第一の吟味の持つ問題場面を徹底的に見誤ることになるだろう。否むしろこの『ヒピアス(小)』の指し示している途は、これとはいわば逆なのである。△嘘つき▽を何者と規定するのかが、がまず問題であった。そしてそれが無能力でも、無知でもなく、能力ある人、智慧ある人として扱えられる、まさにその限りに於て、「何について」能力ある人であるのか、が問われなければならないものとして、それは凡そあらゆる知識の領域に於てのみ意味を有するのである。従つて△嘘つき▽は一切の知識の領域へと解消されてしまい、それが本来的に適用されると思われている、所謂「道徳的場面」など何処にもなくなる、ということになるのである。このことは、例えば、『プロタゴラス』や『ゴルギアス』に於る、「ソフィストとは、人をして語るに巧みなものとなす知識をもっている者」⁶⁾という規定に対して、ソクラテスの行なう反駁に酷似していることに、ひとは気づこう。そこに於てはまた、その「語ること」がいったい「何について」なのかを執拗に問うのであり、この「何について、なのか」が答えられない限り、「語るに巧みなもの」とは、いわば「虚構された、一なるもの」であつて、それは、それぞれの能力あるものへと解消されざるを得ないのである。

さて以上のようなことは、「能力ある人」という把握の成立する場を、厳密に守つてゆくことに於て生じている。しかしたしかに第一の吟味に於ては、「能力ある人」という把握の成立する場を保証し、そのメルクマールとなるものは、「何か

について」という固有の領域の限定にのみ頼られていることは認めねばならない。そしてさらに、その領域の固有性を決定づけているものについては、何も触れられていないことはたしかである。

三

第一の吟味の「意図して嘘をつくものは、心ならずも嘘をつくものよりもより優れている」を受けて、第二の吟味に於ては、「意図して過ちを犯すものと、心ならずも過ちを犯すものは、一体どちらがより優れているか」(三七三C)という問いに置き換えられ、これをめぐって行なわれるが、しかし、問いを変更して、新たに始められる、この第二の吟味の持つ意味は何であろうか。たしかに一見したところでは、この両者の違いは、「嘘をつく」と「過ちを犯す」との違いのみであるかに思われよう。だが、人はこの第二の吟味を、何か第一の吟味を敷衍しただけのものだと看做すことは許されないし、また、それは「嘘をつく」ということが、もっと一般的に「過ちを犯す」として考察されているにすぎないのだ、と解するならば、この第二の吟味の持つ問題は見失なわれてしまおう。無論、この第二の吟味が第一の吟味を踏まえ、それを基礎としていることは認められなければならないが、しかしここには、第一の吟味とは異なった仕方での、問題の取り扱われる位相が実はあるように思われるのである。従って、その位相を明らかにしてゆくことが、いわば問題そのものの所在をつきとめることにもなるであろう。

「意図して過ちを犯すものと、心ならずも過ちを犯すものとは、どちらが優れているか」という問いを考察する場をめぐって、この第二の吟味の引く事例は実に様々であり、多様である。こうした様々な、広範囲に亘る、事例の連関を統一しているものは、あるのだろうか。そしてもしあるとすれば、それは何であるのか。肉体(の使用)、身体の諸器官、道具の類、動物の魂、人間の魂、そして我々自身の魂、こうした場面をめぐって、「善き(立派な)ことと悪しき(醜き)こと、いずれをも成し遂げうるもの」、「意図して悪しき(醜き)ことを成し遂げるもの」が何であるかが問題である。それは、それぞれの場合に行為(成し遂げることを可能にしているものへの問いである。つまり、ここでは「能力」(abilities)

という観点に於て、こうした種々様々な場面が統一的に把えられているといえるのではあるまいか。たしかにソクラテスは、最終的に、正義のことを問題とするまで、この言葉を決して使っていないが、そのことは逆にみれば、そこへ到る一切の考察の場面が、実のところ、まさに「能力」(δυναμις)の一点に絞られていて、それをめぐっていることを意味しているであろう。

この「能力」(δυναμις)というのは、第一の吟味に於ては「それぞれの知識の領域に於て、真・偽いずれをも語ることに出来る・能力ある人」(δυνατός)として、それぞれの固有の領域を限定することによってのみ把えられていたのであるが、この第二の吟味の意味は、この「能力」を「成し遂げること・働き」(ἐργασία)の固有性の観点に於て、もう一度把えなおすことにあつたと思われるのである。すなわちここでは、領域の固有性のみならず、またそれに応じて、それぞれの固有なる働きが確定されてゆくことが特徴的なのである。

ところでここで注意しなければならないのは、このそれぞれに固有の働き(ἐργασία)というのは、この第二の吟味ではすべて事例の場面に於て、通常意味されるような、行為によって成し遂げられる「成果」、乃至は「作品」を意味するものとして決して語られていないということである。ここでは、「成果」や「作品」という、いわば行為の結果となるものには重点がおかれず、むしろその過程とも言うべきものの方に力点があつて、その「行為」そのもの、「成し遂げること」そのことなのである。第一の吟味に於て、嘘つきは「何かを為すこと、何かを作ること」(ποιεῖν)の出来る人と言われる場合、その「何か」には真・偽が、それぞれの場合の成果としてみなされ得るかもしれないのであるが、ここではこの「何かを為すこと、或いは作ること」(ποιεῖν)はむしろ、「何かを成し遂げること」(ἐπιτελεῖν)と言ひ換えられる。そしてこの「何か」(τι)を「成果・作品」の意味に取ることは、ここに挙げられた様々な事例からして出来そうにない。むしろこの場合、「何か」(τι)とは、いわば内的な目的語として、それぞれに固有の領域が定められる時、これに応じた、固有な成し遂げ(ἐπιτελεῖν)の、その固有性を決定しているものである。そのような「成し遂げること」(ἐπιτελεῖν)としての、働き(ἐργασία)なのである。

さらにもうひとつ注意して置くべき点がある。それは、以上のような、「成し遂げること」が、それぞれの領域に於て、

二様に、つまり「よく」(eu)と「悪しく」(kakos)とに語られることである。そしてこれに応じて、よく成し遂げるものは善きものであり、悪しく成し遂げるものは悪しきものであるとされるのである。だがこの「よく」と「悪しく」との意味するところは、それぞれの領域に於て異なるのであり、そして例えば、「競走」という場面では、「よく、悪しく」はそれぞれ、「速く、遅く」へと常に引き戻され得、そこでのみ意味を有するのである。従って、また「醜く、悪しきことを成し遂げる」(ra alaxōta kai rouphōta epitēdeōta)という表現に於ても、決して、それを「成果・作品」という意味に理解する必要はないであろう。

まさに以上のような「何かを成し遂げること」(epitēdeōta)を可能にし、支えるものとしての「能力」が考えられているのだと思われるのである。

さてそれでは、こうした「能力」の把握の転換は、如何なる局面を拓くことになるのであろうか。そのひとつの局面は、例えば道具類や身体諸器官の使用という場面に於て、最も特徴的に窺い知ることが出来よう。人が、それによって立派なことを成し遂げる、その道具は善きものであり、他方、それによって劣悪なことを成し遂げる、その道具は悪しきものである。だがもし人が、善き道具によって劣悪なことを成し遂げるとすれば、それは故意である。なぜなら、人は、その善き道具によって、立派なことを成し遂げることも出来るからだ。たしかに、この道具的与格(instrumental dative)の導入は、問題の理解を容易にさせよう。それは、それぞれの場合に、行為(成し遂げることを可能にしているもの、つまり、或る特定の、固有な働き(érgon)との結びつきに於て扱えられる「能力」を有するものとしての、「能力あるもの」(dunachō)と、これを使用する人間との、明確な分離である。「能力あるもの」は、その働きを「よく」も「悪しく」も成し遂げうるものであるが、しかし現にそのいずれかを撰び取って、行為するのは、この「能力あるもの」を使用する人なのである。

そしてここにはつきりと、第一の吟味に於て予感された問題の場面の重要さを確認することが出来よう。「能力ある人」、「能力あるもの」という把握が、一方ではその能力という点に於て、たしかにそれぞれの場合に「行為を可能ならしめるもの」の把握として十全でありながら、しかし他方、それはまさに、行為の生成する、その位相を何ひとつ明らかにしないのである。「成し遂げうること」は、決して「現に成し遂げる」ことではない。「行為の生成」は、その人の「望む時」と

いう、まさにその点にかかっているものであり、その「望むこと」を根拠付けるものは「能力ある人」の「能力」ではないのである。

だがさらにもうひとつの注目すべき局面がある。それは、我々自身の魂、つまり正義の場面に於て導き出される結論「意図して過ちを犯し、不正を為す人は、善き人以外にはいない」に関わる問題である。人は何故ソクラテスが、他の様々な事例の場面を経ながら、それらの同一性に則しつつ、この結論を導き出し得たかをはっきり確認して置かなければならぬ。それは、正義を、(そしてまた我々自身の善き魂を)「能力・知識」と把える、その限りに於て、まさにその点に於てなのであって、それ以外では決していない。「能力」と把える限りに於て、既に見られたように、それは、それぞれの固有な領域に於て、それぞれの固有な「働き・成し遂げ」を可能にするものである。ではしかし、我々自身の魂の場合、その固有な「働き・成し遂げ」とは、何であるのか。なるほど、その場合には、「不正を為すこと、つまり悪いことを為すこと」と「不正を為さぬこと、つまり立派なことを為すこと」(三七六A四―五)だ、と様々な事例に倣いつつ、一応は答え得るかも知れぬ。だが、この固有な「働き・成し遂げ」が決定されるのは、それぞれの固有な領域が定められてゆく、その時なのである。では我々自身の魂は、一体如何なる固有の領域に於て、その固有な働きを成し遂げるといふのだろうか。まさに正義を「能力」であるとするこの欺瞞が、そこにある。何故なら、その「能力」たる正義がそこで把えられるという、固有の領域など、決してありはしないからだ。ソクラテスもまた、その領域については何も語ってはいないのである。正義は決して如何なる能力でもないのである。

四

すべての検討を終えたいま、もう一度最初に提出されていた問いへと還り、この『ヒippias(小)』が「何を物語っているのか」を確認しておく。

「意図して嘘をつく人は悪しき人であり、意図して過ちを犯し、不正を為す人は悪しき人である」というヒippiasのよ

って立つ、常識の立場からの主張は、それがまた同時に「意図して不正を為す人」が能力ある人・智慧ある人であり、その能力・智慧故に不正を為すということを自明の前提としているのであれば、結局のところ首尾一貫せず、矛盾したものとなる。」「意図して不正を為す人」が能力ある人であり、智慧ある人であれば、「意図して不正を為す人は善き人以外にはいない」、と常識の立場は主張せざるを得なくなるのである。まさにこの時にこの主張が、決してソクラテスそのひとによって主張されるパラドクスではなく、常識の立場の、ひとつのドクサに内在し、かつそれと相反するドクサという意味でのパラドクスであったことを改めて知ろう。

無論、『ヒippias(小)』の意味はただ、常識の立場が内包している、このような自家撞着を示してみせることのみにあるのではなかったのである。否むしろ、こうした常識の立場の、よって立っている前提こそが、吟味されねばならなかった。すなわち、「意図して、不正を為す人」は能力ある人である、というこの前提こそが問われねばならなかったのである。「能力ある人」という把握が何処で意味を持つことであるかが明らかにされねばならなかったのである。なぜなら、「正しい」、「不正な」とか、端的に「善い」、「悪い」とかいうことは、能力という、それぞれの場合に「行為を可能ならしめるもの」によっては、絶対に把握することが出来ないからである。従ってこの能力というものの有意味に語られる場面が、第一の吟味に於ては、それぞれの固有の領域に力点を置き、第二の吟味では、それぞれの固有の領域に於る、それぞれの固有の「働き」に力点を置いて確立されていったのであった。「能力」というのは、まさにそういう場に於てしか、意味を持たないものなのである。「意図して、不正を為す者」の存在について、ソクラテスが留保を示したのも、まさにこの点にあったのである。つまり、「意図して、不正を為す者」という、常識の立場に於る言い方が可能となっているのは、正義を「能力」と把握するという、まさにそのことよっていたからである。では正義が「能力」でないとすれば、「意図して、不正を為す者」は存在することになるのか、ならないのか、ということについては、無論この『ヒippias(小)』は何も物語ってはいない。しかし既に見たように、我々の「行為する」ということが、決して行為を可能ならしめる能力の問題ではなく、「望む」(意図・意志)というそのことに於て生成し、「正しい」とか端的に「善い」とかいうこともまた、まさにその場に於て、最も本来的に語られるのだということは、いわば陰面という仕方に於て描き出されてはいる。

ともあれしかし、以上のような吟味こそが、「知を愛し求める営みに与かることを要求する人々」(三六三A)の対話の歩みだったのである。

〔註〕

- (1) 第二の吟味とは、三七二A―三七六Cを指し、第一の吟味とは、三六五C―三七二Aを指す。
- (2) 例えば、『メノン』(七七B―七八B)、『プロタゴラス』(三五八C―D)を参照のこと。通常、「不正をなすこと」と「悪をなすこと」とは、一応区別しておかなければならないことであろうが、少なくとも『ヒippias(小)』に於ては、両者の間の区別はないと看做してよい、と思われる。
- (3) 三六五D六―三六六A八の問答に於て、「智慧ある人々」*anōtai*は、*philoσοφοι*から導びき出されているが、この「智慧ある人々」の△は、*σοφία*の「計算」について無知な人の場合にも用いられていることである。
- (4) ソクラテスは、「能力ある人」の、それぞれの領域を示すものと、示さないものとの間に何らかの区分を、ここでもうけているかと言えば、領域を示す場合には、*tepe, kata* 或いは「限定の対格」を使用し、△は、*ἐν*の場合には、*ἐν*が用いられている。面白いことには、この*ἐν*は、「計算」について無知な人の場合にも用いられていることである。
- (5) △は、*ἐν*が何者であるかの検討が開始された時から、何故それが複数形で語られてゆくのか、というその理由を、人は今知るだろう。
- (6) 『プロタゴラス』(三二二D―E)、『ゴルギアス』(四四九C以下)。「ゴルギアス」に於る、こうした問答の行く末が何処であったかを知るならば、この種の問答の重要さに気づくであろう。
- (7) 「出来る」(*dunatai*)という動詞形が、三七四A八に一度用いられている以外には、である。
- (8) この*epōtai*という言葉そのものは、三七五A四に、「その魂の、様々な働き」という複数形で用いられている。
- (9) 通常は「作品・成果」(つまり、健康)との関係で捉えられることの多い、*θεραπεύω* 医術までもが、この第二の吟味では、*ψυχή* 医者の魂という仕方、*ἐπιπέμπω* 「働き」の観点から捉えられているのである。つまり、例えば「医療を施すこと」がそれに当るであろう。

(昭和五十四年十月三十一日受理)